

### 「betrachtenすべき」は「再生産過程の攪乱」か 「第3部第7章」か：富塚良三氏の拙訳批判 に反論する

OTANI, Teinosuke / 大谷, 禎之介

---

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

70

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

213

(終了ページ / End Page)

261

(発行年 / Year)

2002-12-05

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003155>

# 「betrachten すべき」は「再生産過程 の攪乱」か「第3部第7章」か

— 富塚良三氏の拙訳批判に反論する —

大谷 禎之介

## 目次

- はじめに
- 1. 問題の箇所
- 2. 論争の発端と再燃
- 3. 富塚氏の拙訳批判
- 4. 筆者の反論
- 5. 富塚氏の再度の批判
- 6. betrachten という語の意味
- 7. マルクスの使用例
- 8. betrachten の対象はなにか？
- むすび

## はじめに

富塚良三氏は、論稿「再生産論の課題——『資本論』第2部初稿第3章  
結節「再生産過程の攪乱」について——」（『商学論纂』第42巻第5号、  
2001年3月）で、富塚氏による拙訳批判にたいして筆者が拙稿「メガの編  
集者は禁欲を要求される」（『資本論体系』第1巻「月報」、2000年12月）  
で行なった反論に論評を加えられるとともに、同時に「大谷氏の論稿に始  
発した〈次の Abschnitt〉の問題〉をめぐる論争」（68ページ）にも触れ  
られて、同稿の末尾で、「以上をもって、10年越し（ないしは25年越し）

の論争問題も、すでに十分に決着のついた問題となったと考える次第である」(71ページ)、と書かれている。

たしかに「論争」の最大の焦点は、現在のところ、二つである。すなわち、第1に「次の Abschnitt」への指示を含むエンゲルス版『資本論』第2部注32の内容をどのように読むか、という問題であり、第2に、『資本論』第2部初稿の末尾近くにある「第3部第7章」への指示をどのように読むか、という問題である。

筆者は、富塚氏の恐慌論それ自体についての検討はひとまず置き、まずなによりも、氏がマルクスを読むさいの読み方が我田引水ならぬ「我田引用」であることを明らかにすることによって、氏がいかにあやふやな仕方でもマルクスの記述を自説の論拠にしたてあげているかということをも明白にしたいと考える。焦点となっている二つの論点のうち、エンゲルス版第2部注32にかんする問題は別稿で論じることとし、本稿では第2部初稿での「第3部第7章」への指示にかかわる問題を取り扱う。

## 1. 論争の発端と再燃

1990年4月に『資本論体系』第4巻「資本の流通・再生産」(富塚良三・井村喜代子氏編集、有斐閣)が刊行された。この書で富塚氏は、『資本の流過程——『資本論』第2部第1稿——』(大月書店、1982年)のなかで筆者が邦訳を担当した第3章中の一つの訳文について、「誤訳である」と断定され、氏の独自の訳文を掲げられ、しかもこの訳文を、氏の主張の一つの重要な論拠にされた。しかも、この箇所的重要性を強調するかのようになり、同書の巻頭に、この箇所を含む草稿ページの写真を掲げられたほか、付録の「月報」には拙訳の批判を含む富塚氏の論稿「『資本論』第2部初稿第3章第9節「再生産過程の攪乱」について」を収められた。

これを見た筆者は、ただちに『体系』の刊行元である有斐閣の編集部へ電話をいれ、『体系』の次巻の「月報」にこの「誤訳」の非難にたいする

筆者の反論を掲載することを求めた。その場では編集部は「それは当然のことだ」として掲載を快諾したにもかかわらず、その後しばらくして、電話で「掲載はできないことになった」と断わってきた。「それでは『書齋の窓』に書かせてほしい」と言ったところ、「それならいいでしょう」ということだったが、のちにこれもだめだということになった。このような経過の背景にどういうことがあったのかは容易に想像ができたが、富塚氏の非難に丁寧に答えるために——本稿の「6 マルクスの使用例」に収録したような——若干の考証的調査をしておきたいと考えてもいたので、有斐閣ないしは『体系』の編集者とそれ以上のやりとりをするのはやめた。そしていつものさぼりぐせのために、そのまま長い間、この件について触れないままになってしまっていた。

ところが、その10年後の2000年に、思いがけなく、同『体系』第1巻「資本論体系の成立」（服部文男・佐藤金三郎氏編集）の編集者から、同巻の「月報」にMEGAにかかわる一文を寄せるように依頼された。筆者にとってこれは、かつて果たせなかった『体系』への反論掲載の願ってもない機会となった。筆者は、「メガの編集者は禁欲を要求される」というタイトルで、MEGAにかかわる思い出とともに、富塚氏による「誤訳」批判に反論を書いた。

富塚氏の最近の論稿「再生産論の課題」は、これにたいする駁論として発表されたものである。

## 2. 問題の箇所

係争の箇所は、マルクスの『資本論』第2部第1稿の末尾近くにある一文である。

第2部第1稿は、1988年にMEGA第2部第4巻第1分冊に収められ、公表された。問題の箇所の原文はMEGAのこの巻で見ることができ（S. 381）、またこの箇所を含むページのフォトコピーも掲載されている（S.

378)。

第2部第1稿は「第1章 資本の流通」,「第2章 資本の回転」,「第3章 流通と再生産」の三つの章からなっており,第3章はさらに九つの節に分けられている。その最後の節は「9)再生産過程の攪乱」<sup>1)</sup>であるが,ここには本文と見なしうるものは1行も書かれておらず,ただ,そのあとに „Zu betrachten ch.VII. Buch III.“ という一文があるだけである。

1982年刊行の『資本の流通過程——『資本論』第2部第1稿——』(大月書店)は,モスクワから提供された草稿の解読文による邦訳であったが,その第3章を担当した筆者は,この一文を,「これは,第3部第7章で考察すべきである」と訳した。この訳は,1974年刊行のロシア語版『著作集』第49巻での,「第3部第7章で考察すること〔 Рассмотреть в гл. VII, книги III. 〕」というロシア語訳とも一致している。

### 3. 富塚氏の拙訳批判

富塚氏はこの拙訳について,『資本論体系』第6巻の本文と「月報」との両方で,「誤訳」だと書かれた。富塚氏によれば, „Zu betrachten ch. VII. Buch III.“ は「第3部第7章を考慮すべきである」と訳されるべきなのである。

富塚氏は,「この第9節には „Zu betrachten ch.VII. Buch III.“ 「第3部第7章を考慮すべきである。」という指示書きのみが記され,本文としては何も記されていない」(297ページ)と書かれたうえで,この箇所注をつけ,そのなかで次のように書かれている。

「この箇所は,訳書『資本の流通過程』の当該箇所においては,

1) 厳密には「9)再生産過程における諸攪乱(9) Störungen im Reproduktionsproceß)であるが,直後に書かれたプランでは「6)再生産過程の諸攪乱(Störungen des Reproduktionsprocesses)」となっている。マルクスの意識ではこの両者はほとんど等価であったと思われるので,本稿では,以下,訳書と同様に,簡単に「再生産過程の攪乱」としておく。

「これは、第3部第7章で考察すべきである」となっているが、誤訳である。意味が殆ど反対となるだけに重大な誤訳であるとおもわれるが、紙幅の都合上、この問題は、その「第3部第7章」が何をさすのか？ という問題とともに本書の「月報」欄で論ずることにする。」(298ページ。傍点は富塚氏によるもの。)

そして、「月報」での論稿「『資本論』第2部初稿第3章第9節「再生産過程の攪乱」について」の冒頭で、ふたたび、次のように書かれている。

「『資本論』第2部初稿第3章「流通と再生産」の最終節は第9節「再生産過程における攪乱 (Störungen im Reproductionsproceß)」であるが、そこには „Zu betrachten ch.VII. Buch III.“ すなわち「第3部第7章を考慮すべきこと。」という指示書きのみが記されている。第3部第7章におけるより具体的な問題視角からする論述を予定し、それとの対応を念頭におきながら、当面の論理段階に固有の問題視角から「再生産過程における攪乱」の問題を論じよう、というのがその論旨であったかと解される。この点については、その「攪乱」を規定する諸要因としてはどういう諸要因が考えられていたであろうかを含めて、本書の「論点」B、第9論文「拡大再生産の構造と動態〔Ⅱ〕」の第1節の「補説」において論じた。ところで、その「補説」でも簡単に注記しておいたように、第2部初稿の訳書『資本の流過程』においては、この第9節の指示書きは「これは、第3部第7章で考察すべきである」と記されている(『資本の流過程——『資本論』第2部第1稿——』、大月書店、マルクス・ライブラリ(3)、1982年、294ページ)。これだと「再生産過程における攪乱」の問題は〈第2部第3章で論ずべき問題ではなく、第3部第7章で論ずべき問題である〉ということになり、殆ど正反対の意味となる。だが、これは明らかに誤訳、しかも殆ど逆の意味となるだけに、重大な誤訳というべきであろう。その訳書の「訳者あとがき」には、「マルクス=レーニン主義研究所から提供された手稿のコピーおよびタイプライターで書かれたそ

の解説文を底本とし、ロシア語版全集第49巻を参考にした。」(前掲訳書、304ページ)とあるので、一般に間違いないものと信じられてきているようであるが、しかし、新MEGA第2部第4巻第1分冊381ページに記されているのは、前記の „Zu betrachten ch.VII. Buch III.“ であり、しかもその前ページにマルクスの手稿のその箇所すなわち初稿最終ページのコピーが掲載されていて、第9節の指示書きがこのとおりであることを確認することができる。なお、「タイプライターで書かれた〔手稿の〕解説文」もまた、実はこれと全く同文だったのである。再生産論と恐慌論の関係を考えるうえに極めて重要な意味をもつ個所であり、事実これに依拠して、マルクスは再生産論においては「攪乱」や「不均衡」の問題を論ずる意図はなかったのだという主張をする論者も決して少なくはないので(例えば、水谷謙治氏『再生産論』有斐閣、1985年、80-81ページ。高須賀義博氏『マルクスの競争・恐慌観』岩波書店、1985年、44ページおよび240ページ)、然るべく訂正されることを希望する。そもそも、攪乱や不均衡や恐慌の問題は第2部第3章では論ずべき問題ではないとするのがマルクスの趣旨であったとするならば、何故にことさらその第3章の最終節として「再生産過程における攪乱」と題する節を立てたのか不可解であるし、また、前記の指示書きのすぐ後に、「したがって、この第3章の項目は次のとおりである」として掲げられているプランの第6節が再び「再生産過程の攪乱 (Störungen des Reproductionsprocesses.)」と題されているのも如何にも腑に落ちぬことであろう。やはり、「再生産の実体的諸条件」の解明、社会的総資本の「総=流通・再生産過程」の把握を課題とする第2部第3章において、それに固有の方法的限定のもとで可能なかぎり、それに固有の問題視角から、「再生産過程の攪乱」の問題をマルクスは論じようと思図していたのである。そう解するのが自然であり、それを否定すべき格別の根拠はないように思われる。」(「月報」、1-2ページ。傍点は富塚氏によるもの。)

このなかで富塚氏が触れられている MEGA 収録のフォトコピーは、『体系』のこの巻の巻頭に掲げられ、しかもそこには「中段に 9) Störungen im Reproduktionsproceß とあり、その下に Zu betrachten ch. VII, Buch III. とだけ記されている」とわざわざ注意書きまでつけられている。ここからも、この箇所でのマルクスの記述が、編集者兼執筆者である富塚氏にとって、きわめて重要な意味をもつものであったことが伺われるであろう。

これに続けて、富塚氏は、問題の文にある「第3部第7章」とは「何をさすのか」ということを論じ、それは「当時なお構想されていたと推定される第3部のプランの最終章＝第7章「資本主義的生産の総過程における貨幣の還流運動。結び、資本と賃労働。」であった公算大である」とされている。ここで「第7章」のなかに「結び、資本と賃労働」が含まれているのは不適切であるが、それはともかく、この「第7章」が当時のプランの「第7章 資本主義的生産の総過程における貨幣の還流運動」を指すことにはほとんど疑う余地がないと考えられるので、ここでは富塚氏の論稿のこれ以下の部分は度外視しよう。

さて、以上の富塚氏の記述のすべてを注意深く読んでみられたい。不思議なことに、このなかには、ただ、原文が „Zu betrachten ch.VII. Buch III.“ なのだから、これは「第3部第7章で考察すべきである」と読むことはできず、「第3部第7章を考慮すべきである」、と読むほかはないのだ、という断定があるだけで、氏が拙訳を「誤訳」だとされる理由、根拠はまったく書かれていないことがわかるであろう。

氏がそれを書かれなかった理由はまったく容易に推測できる。氏は、„Zu betrachten ch.VII. Buch III.“ という文にある betrachten は他動詞なのだからそのあとには4格の目的語がくるはずだが、ここにあるのは ch. VII. Buch III だけであって、これがその目的語だと読むほかはない、と考えられ、このようなことは説明するまでもないと思われたのである。このことを端的に示しているのが、このたびの論稿「再生産論の課題」での



次の記述である。

「〔ch.VII, Buch III の前に〕 in のないマルクスの文章」は、そのままでは決して「第3部第7章で考察すべきだ」とは読めないはずなのである。„Zu betrachten ch. VII, Buch III.“ というマルクスの原文のままならば、„ch.VII, Buch III.“ が他動詞 betrachten の目的語であるから、当然、「第3部第7章を betrachten すべきだ」と読むより他はない。」(58ページ。)

『体系』第4巻の諸記述を書かれるさいに、氏はおそらく、これは「初歩的な文法上の常識」なのだから、説明するまでもないことなのだ、と考えられたのであろう。氏は、論稿「再生産論の課題」では、筆者の論述について「この初歩的な文法上の常識無視の発言が余りに断定的に言われているのにはいささか辟易し、驚く外はない」(55ページ)と書かれており、また、「„Zu betrachten ch.VII. Buch III.“ という文そのものの構造からして、明らかに誤りである」(53ページ)とも、「„Zu betrachten ch. VII. Buch III.“ は「第3部第7章を betrachten すべきだ」と読む以外にはない。そう読むのが当然なのである」(55ページ)とも書かれている。ここから見ても、氏がこの文をまったく単純に〈他動詞 betrachten+4格目的語 ch.VII. Buch III〉という構造と見る以外にないと思ひ込まれていることがよく分かる。

#### 4. 筆者の反論

『体系』第1巻の「月報」に執筆する機会を与えられた筆者は、4ページというわずかの紙幅のうちの約4分の3を使って、富塚氏への反論を書いた。反論の部分は次のとおりである。

「既刊のメガ第2部第4巻第1分冊には『資本論』第2部の第1稿が収められている。この分冊を編集したのはモスクワのグループで、この第2部第1稿はチェプーレンコが担当した。その第3章の最後

の項は „9) Störungen im Reproductionsproceß“ であるが、そこにはただ一行、 „Zu betrachten ch.VII. Buch III.“ と書かれているだけである。この1行はどのようなことを言っているのだろうか。

モスクワで1974年に刊行されたロシア語版『著作集』第49巻では、この文は「第3部第7章で考察すること〔Рассмотреть в гл. VII, книги III.〕」と訳されている。1982年に大月書店から刊行された『資本の流通過程——『資本論』第2部第1稿——』の第3章は、モスクワから提供された草稿の解説文による拙訳だったが、「これは、第3部第7章で考察すべきである」としていた。どちらの訳でも、 „Zu betrachten ch.VII. Buch III.“ を „Zu betrachten [in] ch.VII. Buch III.“ と読んでいるわけである。

この二つの訳について、富塚良三氏は、「これは明らかに誤訳、しかも殆ど逆の意味となるだけに、重大な誤訳というべきであろう」と書かれた（『資本論体系月報』第6号、1990年）。富塚氏が第1稿のこの一文をきわめて重視されていることは、この『月報』が付された同氏編の『資本論体系』第4巻の巻頭にこの部分を含む草稿ページの写真を掲げられ、そこにわざわざ、「中段に9)Störungen im Reproductionsproceß とあり、その下に Zu betrachten ch.VII. Buch III. とだけ記されている」とまで書かれていることから見てもまったく明らかである。氏によれば、この部分はドイツ語としては「第3部第7章を考慮すべきこと」と読むほかはないのだから、二つの訳は意識して行なわれた改変なのであり、しかも、この文は、「第3部第7章におけるより具体的な問題視角からする論述を予定し、それとの対応を念頭におきながら、当面の論理段階に固有の問題視角から「再生産過程における攪乱」の問題を論じよう、というのがその論旨であったかと解される」ものである。つまりこの箇所は、再生産論と恐慌論との関連についての氏の理解の正しさを示すマルクスの記述として、決定的に重要な箇所なのである。念のために言えば、富塚氏がこ

こで書かれていることのうちで、二つの訳と氏の読み方とは「殆ど逆の意味となる」という点についてはもちろん完全に同意できる。

この第1稿を編集したチェプーレンコは、この箇所をどう読んだのであろうか。まずまちががなく、ロシア語版『著作集』の訳者と同じく、したがってまた拙訳と同じく、「第3部第7章で考察すべきである」と読んだであろう。というのも、マルクスの草稿の多くを原文で見ている者にとっては、マルクスが「第3部第7章を betrachten すべき」と書いているのだなどというのは、ほとんど思いもつかないことだからである。

1998年にベルリン・ブランデンブルク科学アカデミーで編集の仕事をしていたときに、メガ編集の同僚である友人フォルグラーフ (Carl-Erich Vollgraf) とこの箇所の読み方について話をしたことがあった。そのときの会話を書き物にしてのちに彼の確認を得たものがあるので、それを紹介しよう。

\*             \*             \*

大谷 『資本論』第2部第1稿の最後の部分での、„Zu betrachten ch. VII. Buch III.“ という文章はどういう意味なんだろう。ロシア語訳では「第3部第7章で考察すること」となっているし、日本語訳でぼくも「これは、第3部第7章で考察すべきである (Man soll dieses Problem in ch. VII, Buch III betrachten.)」と訳した。つまりどちらも、Zu betrachten [in] ch.VII. Buch III というように、原文に in という語を補って読んでいるわけだ。in のないマルクスの文章をこのように読めるだろうか。それとも、「[この問題の考察のさいには] 第3部第7章を考慮すべきである (Man soll [bei der Betrachtung dieses Problems] ch. VII, Buch III berücksichtigen.)」というふうに読むほかはなく、あるいはまた、そう読むべきなのだろうか。

**フォルグラーフ** 言うまでもないことだが、メガのこの巻のテキストそのものについて言えば、第2部第4巻第1分冊が現にそうやっているように、草稿のとおりにはしておかなければならない。つまりメガのテキストに in を („[in]“ のように編集者の挿入であることを明示するとしても) 挿入することは論外だ。でも、だからと言って、この文章は「第3部第7章を考慮すべきである」という意味だ、ということになるわけではない。

というも、„Zu betrachten ch. VII. Buch III.“ という文章そのものをとってみれば、二様に理解することができるからだ。一方では、もちろん、「第3部第7章を考慮すべきである (Man soll ch. VII, Buch III berücksichtigen)」と読むことができないわけではない。しかしこの文章は、次のように読むことがまったく可能だ。すなわち、„Zu betrachten: ch. VII. Buch III.“ と。そしてこの文章は、semantisch には (意味の上では) 次の文章と完全に等価だ。„Man soll dieses Problem im folgenden Abschnitt betrachten: d.h. ch.VII, Buch III.“ (この問題は以下の部分で考察すべきである——すなわち第3部第7章で。) この場合には、内容的には、ロシア語訳および日本語訳での、「この問題は第3部第7章で考察されるべき」、という訳文とまったく同じことになる。

**大谷** 問題の箇所について、どんな理論的解釈を抜きにしてもそのように言えるということか。

**フォルグラーフ** もちろんそうだ。

**大谷** 君自身は、この文章でマルクスがなにを言いたかったと思うかね。

**フォルグラーフ** マルクスは『経済学批判要綱』から彼の最後の頃の草稿にいたるまで、「これは第7章で論じるべきことである (Dies gehört in ch.VII.)」といった留保的文言をいたるところに残している。だが、マルクスの書いたこうした留保的文言を見てきたかぎり

では、ぼくは、「考慮すべきだ」という意味で、なんらかの章等々を betrachten すべきだ、とマルクスが書いている文章をまったく見たことがない。そのような読み方は、文法的に可能であるとしても、メガ編集者としての僕の語感には、マルクスの文章としてはきわめて異様なものに響く。断言はしないが、ぼくはこの場合、言ってみればほぼ70パーセントほどの確率で、„Zu betrachten: ch. VII. Buch III.“（以下のところで考察すべき——第3部第7章）、と読みたいね。

**大谷** そのように考えるのなら、ロシア語訳も日本語訳も明らかな誤訳だ、と言えるわけではない、ということになるね。

**フォルグラーフ** もちろんだ。もともと翻訳の場合にはいつでも、いくつかの解釈可能性のうちから一つだけを選ばなければならないことが生じるのだから、ロシア語訳と日本語訳で訳者が一つの解釈を選んだのは当然のことだし、そしてこの場合、「これは第3部第7章で考察されるべきである」という方を選んだのも当然のことだ。ぼくが訳者だったとしても同じ選択をしたことは確実だ。

\* \* \*

ドイツ語原文の読み方について、読者は、日本人富塚氏の断定的な文言とドイツ人フォルグラーフの慎重な言い回しとはずいぶん違うな、と感じられるのではなからうか。」（「月報」6-8ページ。）

この拙文で書いているのは、要するに、「„Zu betrachten ch. VII. Buch III.“ は「第3部第7章を betrachten すべきだ」と読む以外にはない。そう読むのが当然なのである」といった「初歩的な文法上の常識」に縛られた形式的な読み方では、マルクスの草稿の文章の真意を正しく読み取ることはできませんよ、ということであり、この „Zu betrachten ch. VII. Buch III.“ という文の場合にはまさにその一例なのだ、ということである。

MEGA 諸巻の、とりわけ草稿を収録する諸巻の編集にあたって、編集

者が苦勞してきていることの一つが、テキストにどの程度まで編集者による手を加えるか、という問題である。「歴史的・批判的全集」の編集のあり方については、「編纂学〔Editionswissenschaft〕」という独自の学問領域が研究を重ねてきており、さまざまな古典家たちの「歴史的・批判的全集」の編纂のさいに、その成果が生かされている。MEGAについても例外ではない。すでにソ連と東ドイツで編纂が開始されたときから、編纂学の最新の成果を意識的に取り入れる努力が行なわれていたが、MEGA事業が国際マルクス＝エンゲルス財団に移行したのちの1992年3月に、エクサンプロヴァンスで開催された——筆者も参加した——「編集基準(Editionsrichtlinien)」の検討会議では、テキストに、どのような場合に手を入れ、どのような場合に手を入れないか、また手を入れる場合にはどのような仕方で行なうか、という点について長時間の議論が行なわれた。この議論は、「歴史的・批判的全集」にあっても、編集者がテキストに手を加えなければならない、手を加えるべき場合があるということを前提にしている。問題は、どのような場合がそれに当たるか、そしてそのような場合にはどのように手を加えるか、ということなのである。

実際のMEGA編集の現場では、さまざまなケースについて、テキストに手を加えるべきかどうかについての判断を迫られる。それには、マルクスの単純な引用ページの誤記や歴史的事実についての年数の誤記のようなものから、いったん書いたものを削除したり訂正したりするさいに必要な語が削られたままになっている場合にそれをどのように記述するか、あるいは、マルクスが直前の文での表現に引張られて単純な誤記を行なっているのをどうするか、人名を錯覚によって間違えている場合にどうするか、「何ページに続く」というメモでのページ数がのちのノンプルの打ち変えで異なってしまう場合にどのように記述するか、さらには、明らかな単語の書き落としをそのままにしておくか、等々、さまざまなケースがあるのである。新MEGAでは、もちろん、極力原文をそのままテキストにすることが原則であり、新しい「編集基準」では、文法的に誤って

いる場合でさえも、そのことが明らかに見て取れるようなときには手を加えないことになっている。どのような場合にどのように対処するかということについての大枠は「編集基準」に規定されてはいる。しかし、実際には、「編集基準」とその細則とによるだけでは一義的に決定できないケースがたえず生じてくる。たとえば、なんらかの単語を補わなければ読者にはなんのこともやら分からないが、編集者にはどの単語を補うべきかがはっきりとした根拠をもって推定できる場合には、編集者は編集者用の角括弧([ ])に編集者用の書体 (Arial というフォント) で挿入することになっているが、なにがはっきりとした根拠と言えるのかについては、編集者が責任を持って判断しなければならないのである。

MEGA では、編集者が、テキストに編集者用の書体と角括弧とを使って挿入するのではなく、テキストそのものに変更を加えた場合は、それを逐一「付属資料 [Apparat]」の「訂正一覧 [Korrekturenverzeichnis]」に記載することになっている。MEGA 第 2 部の各巻につけられた「訂正一覧」を見れば、マルクスによる誤記がいかに多いか、そのなかには文法的な不一致や、「消費」を「生産」と書き間違えたものなど、きわめて多様なものがあることが分かるであろう。このほかにも、編集者は誤記ではないかと思いつつも、境界線上のものとして手を加えないでそのままにしているケースも多々あるのである。

このような作業が必要になるのは、もともと、いま挙げたように草稿にはきわめて多くの誤記や文章上の欠落があるからである。草稿を正確に読み取るという作業は、そのような誤記や文法的な誤りをそのようなものとして認識したうえで、マルクスなりエンゲルスなりが書こうとした内容を把握する、という作業でもあるのである。いったい富塚氏は、マルクスが否定詞 (たとえば nicht) を書き落したり、誤って否定詞を二度書いて二重否定にしてしまったりしていることが明らかなマルクスの文を見たときでも、こうした誤りを訂正してその文を読んではならないのだ、と考えられるのであろうか。

問題の箇所について言えば, „Zu betrachten ch. VII. Buch III.“ という文を単純に〈他動詞 betrachten+4 格目的語 ch. VII. Buch III〉という構造と見てすまずことはしない, というのが, MEGA の編集に携わっている者のごく普通の姿勢であり, 感覚である。上記の拙文でのフォルグラーフの発言は, まさにそうした姿勢を示しているものなのである。

## 5. 富塚氏の再度の批判

さて, すでに述べたように, 上の拙文にたいして富塚氏は「再生産論の課題」という論稿を書かれて, 筆者に反論を加えられた。

富塚氏はこのなかで, 前掲の拙稿について, 「その論旨はまた甚しく明快さを欠き, わかり難いものである」と言われ, また「余り論理的とはいえないので, それを整理し要約することは困難である」と言われている。氏がこのように感じられた理由はきわめて簡単なことである。それは, さきにも引用したように, 氏が, 「„Zu betrachten ch. VII. Buch III.“ は「第3部第7章を betrachten すべきだ」と読む以外にはない。そう読むのが当然なのである」と思い込まれ, 筆者が氏のこの思い込みに同じようとしなことが理解できないでいる, ということなのである。だから, 拙稿で, この箇所は「第3部第7章を betrachten すべきだ」と読むべきところではないのだとし, 〈これ以外の読み方ができるだけでなくて, 自分もそのように訳しただろう〉, というフォルグラーフの見解を紹介しても, 氏はこのような読み方がありうるということを考えてみることさえできない。

氏は, 「„Zu betrachten ch. VII. Buch III.“ は「第3部第7章で考察すべきだ」と読むのが当然であり, それを「第3部第7章を betrachten すべきだ」と読むなどということは, マルクスの原文の解説やメガのテキストの編集に携わっている者にとっては「思いもつかないこと」だという, この初歩的な文法上の常識無視の発言が余りに断定的に言われているのには



いささか辟易し、驚くの外はない」と言われ、続けて、「一体、これはどうしたことであろうか？」と仰天されたうえで、「だが、„Zu betrachten ch.VII. Buch III.“ がそのまま「第3部第7章で考察すべきだ」とは到底読めないであろうことぐらいは、実は大谷氏自身が承知していることではなかろうか？」と自問され、「„Zu betrachten ch. VII. Buch III.“ は「第3部第7章を betrachten すべきだ」と読む以外にはない。そう読むのが当然なのである」という断定を繰り返される（55ページ）。

そしてそのすぐ先で、「これは、第3部第7章で考察すべきである」という訳者の独自の見解を強く反映した文を訳文として掲げること自体がすでに根本的に問題なのである」（傍点は引用者）と書かれているところに、氏が拙訳を、筆者の「独自の見解を強く反映した」ものだと思われていることが露骨に示されている。つまり、氏は、筆者が、「第3部第7章を betrachten すべきだ」と読む以外にはない」にもかかわらず、そしてまたそのように「到底読めないであろうことぐらいは……承知している」はずの筆者が、それをあえて「第3部第7章で考察すべきだ」としたのは、筆者の「独自の見解」をこの訳文に反映させようとしたからなのだ、と言われているのである。

ここで氏が、筆者の「独自の見解」ということで考えておられるのがどういうことであるかということ、氏が次のように言われるところからはっきりと読み取ることができる。氏は今度の論稿で、「ロシア語訳と大谷訳の「二つの訳は意識して行なわれた改変なのである」などとは私自身は何処にも書いていない」（56ページ）などと弁明されているが、氏は、拙訳にたいして、「論述にさいしての留意事項を記した指示書きを論述箇所の指定と見做し、「再生産過程の攪乱」の問題は第2部第3章においてではなく第3部第7章で論ずべき問題である」とここでマルクスが記しているかのように訳したものだ」と言われているのである（52ページ）。言うに落ちず語るに落ちるとはこのことである。氏はさきにも見たように、すでに『体系』第4巻で、水谷謙治氏と高須賀義博氏とを例にとり、「これに依

拠して、マルクスは再生産論においては「攪乱」や「不均衡」の問題を論ずる意図はなかったのだという主張をする論者も決して少なくはない」と書かれていたが、今回の論稿でも、「第2部初稿の末尾に記されているこのプランは、再生産論の課題をマルクスの本来の意図に即して把握するうえで極めて重要な意味をもつ。それは、一方的に方法的限定のみを強調し再生産論の恐慌論に対してもつべき意義を negative にしかとらえようとしないわが国の一部の論者たちの見解がいかにも誤ったものにすぎないかを極めて端的に示すものといつてよいであろう」（51ページ）と、問題の一文が氏の理論的な見解を支える「極めて重要な意味をもつ」箇所であることを明記されている。ここからはっきりと読みとれるのは、氏の拙訳にたいする「誤訳」の非難は、初歩的な文法が分からずに「誤訳」したというものではなくて、筆者が「第3部第7章を betrachten すべきだ」と読むべきことを承知していながら、それにもかかわらず、あえて「再生産過程の攪乱」の問題は第2部第3章においてではなく第3部第7章で論ずべき問題であるところマルクスが記しているかのように」原文を意識的にねじ曲げたのだ、という非難なのだ、ということである。これを「意識して行なわれた改変」という非難だと言わずして、なんと言えばいいのであろうか。

ここで、念のために、一つはっきりさせておきたいことがある。筆者は「月報」の拙文で、「富塚氏がここで書かれていることのうち、二つの訳と氏の読み方とでは「殆ど逆の意味となる」という点についてはもちろん完全に同意できる」（6ページ）と書いた。富塚氏が「殆ど逆の意味となる」と言われたのは、筆者の訳によればマルクスは「再生産過程の攪乱」を第2部第3章ではなく第3部第7章で論じようと考えていたことになるのに対して、氏の訳では、「第3部第7章におけるより具体的な問題視角からする論述を予定し、それとの対応を念頭におきながら、当面の論理段階に固有の問題視角から「再生産過程における攪乱」の問題を論じよう」ということになるのであって、この両者は「殆ど逆の意味」だ、ということである。

あった。「完全に同意できる」と筆者が書いたのは——言うまでもないことではあるが——「殆ど逆の意味となる」ということについてだけであって、筆者の読み方だとマルクスが「再生産過程の攪乱」を第2部第3章ではなく第3部第7章で論じようと考えていたことになる、という富塚氏の勝手な推測についてはまったくない。

筆者が「殆ど逆の意味となる」と言うのは次のことである。筆者の訳では、マルクスは第3部第7章で「再生産過程の攪乱」を「考察すべきだ」と言っていることになる——ただし、いますぐ述べるように、このことは第2部第3章が「再生産過程の攪乱」を論じることを排除するものではない——が、富塚氏の訳では、第2部第3章の一節で「再生産過程の攪乱」を取り扱うさいに——なんらかの意味で——第3部第7章のことを考慮に入れておかなければならないと言っているだけで、第3部第7章がどのような意味で「再生産過程の攪乱」に関連するののかということとはまったく言われていないことになる。両者の読み方の違いは、マルクスの文言についてこのような大きな解釈の違いをもたらすのであって、このことを筆者は、「殆ど逆の意味となる」という点についてはもちろん完全に同意できる」と書いたのであった。

氏が思い込まれているように、たしかに「9)再生産過程の攪乱」というタイトルの直後に「これは、第3部第7章で考察すべきである」と書かれているのは、一見したところ、異様に見える。しかも、その直後に書かれている第2部第3章のプランでも、「7)第3部への移行」のまえに「6)再生産過程の攪乱〔Störungen des Reproductionsprocesses〕」という項目があるのであって、マルクスが第2部第3章で「再生産過程の攪乱」という一節を設けてこの問題を論じるつもりであったことはほとんど疑いようがないのだから、なおさらのことである。それにもかかわらず、ここには「これは、第3部第7章で考察すべきである」と書かれている。そこでわれわれに課されるのは、この一文でマルクスが考えていたのはどのようなことであったのか、ということ、この文が置かれている文脈、前後の関

連から正しく読み取ることである<sup>2)</sup>。

いまのところ筆者には、この一文は、次のような意味をもつものだったのだとしか考えられない。すなわち、「第2部第3章では1節を立てて再生産過程の攪乱について主題的に論じるが、しかし、この問題はさらに第3部第7章でも考察しなければならない」、ということである。「9)再生産過程の攪乱」というタイトルを書きながら、マルクスはその中身を一行も書かなかった。そしてそこに、「第3部第7章で考察すべきである」というメモを書き付けた。このメモの意味はこのようなものであるとしか考えられないのである。

「第3部第7章で考察すべきである」となっていたなら、それは、再生産過程の攪乱は第2部第3章ではなくて第3部第7章で考察すべきだと言っていることになる、という読み方は、一つの読み方ではあるが、唯一可

---

2) なお、筆者に反省すべき点があるとすれば、筆者には、次のようなことを言われる人がでてくるなどというところまで思っていたことができなかったことである。

「原文とは異なる訳文を敢て掲げる場合には、それに訳註を付して、原文は „Zu betrachten ch.VII, Buch III.“ であるが、ここはロシア語訳に従って、「原文に in という語を補った」(大谷氏自身の言葉)訳文を掲げておくことにする。と、一般の読者によく分かるようにしておき、どう解するかを「読者にまかせる」べきであったのである。」(「再生産論の課題」, 56ページ。傍点は富塚氏。)

ここで富塚氏は、筆者が「ロシア語訳に従った」かのような印象を与えるように書かれているが、氏自身もそのように判断されているのであろうか。もしそのように判断されたのであれば、なにをもってそのように判断されるのであろうか。筆者は自己の責任において自己の読み方でそのように訳したのであって「ロシア語訳に従った」のではまったくない。そのように判断された根拠を氏ははっきりと示すべきである。氏は、拙訳のなかでロシア語訳と同じ読み方をしているところのすべてについて筆者が「ロシア語訳に従った」と言われるのであろうか。もしそう言われるのでないとしたら、この箇所だけで筆者が「ロシア語訳に従った」かのように言われる理由はなにか。意図してこのように書かれたのでなかったのだとすれば、氏は、思わず知らずこうした小細工をしないではない自らの性癖に思いを致すべきであろう。

富塚氏の言われるように「一般の読者によく分かるように」しなければならぬとすれば、それは氏が思い込まれているように、マルクスが「第3部第7章を考慮すべきである」と書いていた場合のことであって、そうではないここで注記するとすれば、富塚氏のような人がでてくることを予測して、「この文の原文は „Zu betrachten ch.VII, Buch III.“ であって、このまま読めば「第3部第7章を考察すべきである」ということになるが、マルクスの真意は明らかに „Zu betrachten in ch.VII, Buch III.“ ということであるので、このように訳しておく」といったなくもがなの注をつけておくことでしかない。富塚氏のような人がでてくることを予測できなかったのは、たしかに筆者の落ち度ではあった。

能な読み方ではない。

ここでは、現に書かれている「第3部第7章で考察すべきである」という覚え書きが、第2部第3章で再生産過程の攪乱を論じようとしているマルクスの意図とどのようにかかわり、整合的に理解できるのか、ということが読み手の解くべき一種の謎となっているのである。マルクス自身は謎をかけようとしていたわけではない。ただ、「9)再生産過程の攪乱」というタイトルを書き、その本文を書かないで、彼の意図をメモ書きした。読み手を想定して書かれたのではなかったこのメモ書きをどのように読むかが、読み手としてのわれわれにとっての謎となっているのである。

さて、筆者はこのように考えているのであって、筆者に対する富塚氏の非難、すなわち「論述にさいしての留意事項を記した指示書きを論述箇所指定と見做し、「再生産過程の攪乱」の問題は第2部第3章においてではなく第3部第7章で論ずべき問題である」とここでマルクスが記しているかのように訳したもの」という非難はまったくいわれなきものである。このようなことを言われるからには、富塚氏は、筆者がこのような意図をもっていたことを示す論拠を挙げるべきであるが、できるはずもないことから、そこにあるのは一方的な断定だけである。

他の論者が、拙訳を通じて第2部第1稿に接し、「第3部第7章で考察すべきである」という文章があることから、マルクスは第2部第3章では再生産過程の攪乱を考察するつもりではなかったのだ、と結論するとしても、それは訳者である筆者の責任ではない。筆者は、その直前のタイトルである「9)再生産過程の攪乱」を抹殺したわけでもなく、その直後のプランにある「6)再生産過程の攪乱」を覆い隠したわけでもないからである。これらのものを率直に見るなら、マルクスが第2部第3章で再生産過程の攪乱を論じようとしてはいなかったなどという結論を出すことができるはずもないであろう。

以上のところから逆に照射されるのは、富塚氏が、ここでマルクスが「第3部第7章で考察すべきである」などと書いていたとすれば、この文

からはマルクスが、再生産過程の攪乱は第2部第3章で論じないで第3部第7章だけで論じる、と言っていることになるのだ、とひたすら思い込まれて、そんなことを書くはずはないのだ、と考えられているという事実である。氏には、第2部第3章で再生産過程の攪乱を考察するということと、「これは、第3部第7章で考察すべきである」というメモ書きとの両立は想像もできないことのようにである。

そのことをはっきりと示しているのが、氏の次の言明である。

「大谷氏はこのプランの内容との関連については全くふれようとしていないが、この点こそが決定的に重要なのであり、このプランの内容に照らして大谷訳の誤りであることは明白である。もし仮に、大谷訳ならびにそれと類似の解釈（例えば MEGA 第II部第4巻編集部の見解）が妥当だとするならば、マルクスは第2部初稿の最終ページという同一ページで同時に正反対のことを述べていることになるからである。」(63ページ。)

氏にまったく分からないのは、筆者が「プランの内容との関連については全くふれようとしていない」理由である。それは、„Zu betrachten ch. VII. Buch III.“ という文の読み方は「プランの内容との関連」によって左右されるものではなく、まずなによりもマルクスの文体そのものの理解にかかっているからであり、しかもこのケースではこの文の意味はほとんど確定的に読みとれるからであった。そのように読みとれた文の意味が、文脈の前後と一見矛盾するかのように見えたとすれば、そのときにはじめて、文脈からすればこの一文はどのような含意をもっているのだろうか、ということを決済すべきことになるのである。ところが、氏には、「大谷訳……が妥当だとするならば、……同一ページで同時に正反対のことを述べていることになる」としか思えない。

そこで氏を助けるために登場するのが、この文を「初歩的な文法上の常識」を動員して、〈他動詞 betrachten+目的語 ch. VII. Buch III〉と読み、「第3部第7章を betrachten すべきである」と訳するという迷案である。

しかしながら、このように訳そうとすると、ただちに新しい問題が浮かび上がるはずである。すなわち、betrachtenをどのように訳すか、という問題である。〈～を betrachten する〉というときにごく普通に使われる「考察する」という訳語を採用すれば、「第3部第7章を考察すべきである」ということになる。富塚氏の語感をもってしても、この訳文の珍妙さは明らかだったようである。マルクスがここでそんな意味で——すなわち「考察する」という日本語で表現できるような意味で——betrachtenを使うとは考えにくい。そこで氏が思いつかれたのが、〈～を betrachten する〉というときの betrachten に、「考察する」という語とは別の訳語を当てることであり、それが「考慮する」という語だったのである。

氏はこのことを、今度の論稿で次のように説明している。

「私は、ここでの betrachten に「考慮する」という訳語を当てたが、その「考慮する」という言葉を、それが本来もっていた重<sup>い</sup>語<sup>義</sup>において、充<sup>分</sup>に念<sup>頭</sup>に置<sup>く</sup>という意味合<sup>い</sup>で用いた。訳としては、「(に)目<sup>を</sup>向<sup>ける</sup>、(に)心<sup>を</sup>向<sup>ける</sup>」等の betrachten の本来の語義に沿うものであり、また、前記のプランと整合的に、執筆にさいしての、すなわち、この問題を第2部第3章の最終節で論述するにさいしての、留<sup>意</sup>事<sup>項</sup>を書きとめたものとしての、この指示書きの趣旨を正しく伝えるものであれば、それで良いであろう。」(59ページ。)

この引用の後半から露骨に読みとれるのは、氏にとって肝心なのは、「前記のプランと整合的に……この指示書きの〔氏の考えられるところの〕趣旨を正しく伝えるもの」だということであって、訳語もそれに適合するものでなければならなかった、ということであるが、それはともかくとして、氏が前半で、「考察する」という日本語の代えて「考慮する」という日本語を当てたことについて説明しているところをみておこう。

ここでは、なぜ「考察する」ではなくて「考慮する」という語にしなければならぬのか、ということについてはまったく説明されていない。その代わりに、氏がここで「考慮する」という語をどういう意味をもつもの

として使っているのか、ということの説明して、「考慮する」という日本語の語「が本来もっていた重い語義において、十分に念頭に置く」という意味合いで用いた」と言われている。だから、氏の「第3部第7章を考慮すべきである」という訳文は、氏によれば、「第3部第7章を十分に念頭に置くべきである」という意味なのである。そして、氏によれば、betrachten という語の「本来の語義」は、「(に)目を向ける、(に)心を向ける」等」であって、「十分に念頭に置く」という日本語は、betrachten のこの「本来の語義に沿うもの」なのである。

ここから、氏がここでなぜ「考察する」という語を使わなかったのか、ということがいよいよはっきりと分かってくる。あるものを「考察する」というのは、それを研究の俎上に載せ、それを分析の対象とするということである。第3部第7章というのは、書き物の一部分であって、この書き物が研究し分析する対象そのものではない。しかも、この章は、まだ書かれていない、この先で書くつもりでいるものなのである。しかし、「第3部第7章を考察すべきである」とするならば、そのような、まだ書かれてもいない、書き物の一部分である第3部第7章そのものを、研究の俎上に載せ、それを分析の対象とする、などという珍妙きわまりないことを言っていることになる。そこで富塚氏は、「第3部第7章を betrachten する」というさいの betrachten は、第3部第7章を〈研究の俎上に載せ分析の対象とする〉という意味ではないのだ、そうではなく、第3部第7章を「十分に念頭に置く」という意味なのだと、betrachten に氏独自の解釈を施してこの場を切り抜けようというのである。

それでは、betrachten をこのように解釈することによって、第3部第7章が「再生産過程の攪乱」についてどのようなことを書こうとしていたかについて、なにか分かるようになったのであろうか。「第3部第7章で betrachten すべきだ」というのであれば、マルクスが「再生産過程の攪乱」を第3部第7章での Betrachtung の対象の一部とするつもりだったことが言われていることはたしかである。ところが、「第3部第7章を十



分に念頭に置くべきだ」というのであれば、そこで「再生産過程の攪乱」を「考察」の対象としようとしていたのかどうかはまったく分からない。「再生産過程の攪乱」をそこで直接に「考察」の対象にするのではないけれども、第3部第7章で書こう考えていたことがそれ以外のなんらかの意味で「再生産過程の攪乱」という問題に関連があり、だから、「再生産過程の攪乱」を論じる第2部第3章のこの節でも、第3部第7章のことを念頭に置いておくべきだ、と言っていると読むことも可能である。つまり、富塚氏のいうこの「留意事項」は、第2部第3章で「再生産過程の攪乱」を論じるさいに第3部第7章のことを「十分に念頭に置く」必要がある、と言っているだけで、第3部第7章ではなにが論じられるのか、そこでは再生産過程の攪乱そのものについても論じられるのか論じられないのか、なぜそこを「十分に念頭に置く」必要があるのか、などということについては、まったくなにひとつ語っていないことになるのである。

そこでこの関連については、氏自身が、マルクスの言葉に縛られないで自由に——得手勝手に——推測することができるようになった。それによって得られたのが、「第3部第7章におけるより具体的な問題視角からする論述を予定し、それとの対応を念頭におきながら、当面の論理段階に固有の問題視角から「再生産過程の攪乱」を論じよう、というのがその論旨であった」（『体系』第4巻「月報」1ページ）という推論であり、「第3部第7章におけるより具体的な問題視角からする論述を予定し、それとの対応を念頭におき意識しながら、第2部第3章の論理段階に固有の問題視角から「再生産過程の攪乱」の問題の論述が展開されるべきだという、その意味での留意事項についての指示書きだ」（「再生産論の課題」, 57ページ）という解釈である。これが一つの解釈ないし推論にすぎず、マルクスの文言の富塚氏による訳文自体から自明のこととしてでてくるものでないことは言うまでもない。言えるのは、富塚氏のこの解釈は氏の訳文によるマルクスの文言と直接には矛盾しない、ということだけである。

そうだとすると、富塚氏が『体系』第4巻の巻頭に麗々しく、第2部第

1 稿のなかの当該箇所を含むページの photocopy を掲げられ、その下に、「中段に9) Störungen im Reproductionsproceß とあり、その下に Zu betrachten ch. VII, Buch III. とだけ記されている」と書かれて、わざわざ読者に注意をうながされていたのは、いったいぜんたい、なんのためだったのだろうか、という疑問が生じないわけにはいかない。というのも、この文言は、富塚氏の訳文のように読まれたとしても、富塚氏の主張のどこかを考証的に裏付けるものでも支えるものでもなくて、ただ、氏が自分の主張に合わせて勝手に解釈してみせるのに使われる一つの材料になっているだけだからである。そこではっきりと見えてくるのは、氏がこの箇所を巻頭に掲げられたのは、もっぱら、「この箇所は、訳書『資本の流通過程』の当該箇所においては、「これは、第3部第7章で考察すべきである」となっているが、誤訳である。意味が殆ど反対となるだけに重大な誤訳である」ということを読者にはっきりと印象づけるためだったのだ、ということである。派手な仕掛けの意味が分かってみると、その目的の子供じみたたわいなさにはあきれられるばかりである。

さて、今度の論稿で氏は、「月報」での拙稿について、以上見てきたような、反論にならない反論を延々と書かれたうえで、「この論争は、現行『資本論』第2部第2篇註32の「次の Abschnitt」の問題としてすでにマルクス研究者の間では周知の決着済みの論争の延長線上に位置すると言ってよいであろう」と言われ、続けて、「一見したところ、この類似の二つの論争は、いずれも訓古学的な解釈学の域を出ない、まことに trivial な問題についての論争にすぎないようにも見えるであろうが、第2部第3篇の再生産論は『資本論』全体系のうちに如何なる位置を占め、どういう問題視角から何を解明しようとするものであるかという、極めて根本的な重要問題と関わる論争なのである」と、われわれの「論争」を極度の高みにまで引き上げられる労をとられたのち、「そこで、〈「次の Abschnitt」の問題〉に関する論争の要点について再度概観したうえで、この二つの論争を通じて、マルクスにおける再生産論の課題を把握するうえにおいて重要

な意味をもつような、どういう事実が照し出され浮かび上がってくるであろうかと考察してみることにしよう」(以上、63ページ)として、「次の Abschnitt」の問題〉について、回想録とも、感想文とも、「決着のついた問題となった」という自己満足の表出とも見えるようなものを書かれている。冒頭で書いたように、「次の Abschnitt」の問題〉をめぐる「論争」については、別稿で取り上げることにしているので、本稿では触れないでおく。

## 6. betrachten という語の意味

そこで、さらに検討しなければならないのは、„Zu betrachten ch. VII. Buch III.“ という文を、富塚氏が主張されるように、「第3部第7章を考慮する」あるいは「第3部第7章を十分に念頭に置く」という意味だと読むことができるのか、ということである。

この検討は、二段に分けて行なわなければならない。まず第1に、そもそも betrachten という語はどのような意味をもち、どのように使われるのか、ということである。そして第2に、そのような意味をもつ betrachten という語をマルクスは彼の書き物のなかで、とりわけ『資本論』およびその草稿のなかで、どのように使っていたのだろうか、ということである。この二段の検討を踏まえることによって、当の „Zu betrachten ch. VII. Buch III.“ という文言についての富塚氏の読み方が可能かどうかが最終的に明らかとなるであろう。

そこでまず、betrachten という語がどのような意味の語であり、どのように使われるのか、ということ調べよう。

まず、現行の三つの代表的なドイツ語大辞典での語義の説明を掲げよう。一つは全6巻の Brockhaus-Wahrig Deutsches Wörterbuch in sechs Bänden, 1980-1984, 一つは全8巻の Duden, Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in acht Bänden, 1993-1995, もう一つは、旧 DDR で

編集された大辞典である *Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache* in 57 Lieferungen, 1967-1977 である。Grimm の辞典 (Bd.1, Leipzig 1854) は、当面の問題にはあまり役立たないので省く<sup>3)</sup>。語義の部分にはとりあえずの拙訳を〔 〕に入れておこう。

- (1) *Brockhaus-Wahrig Deutsches Wörterbuch in sechs Bänden*, Erster Band, A-BT, 1980 Stuttgart, S.653.

„betrachten 1 **jmdn. od. etwas** ~ *längere Zeit nachdenklich od. genußvoll ansehen, anschauen, beobachten* [かなりの時間をかけて、熟慮するように、または十分に味わうように、凝視する、眺める、観察する]; ein Bild, eine Landschaft ~ ; **jmdn.** *forschend, heimlich, prüfend, sinnend, verstohlen, wohlgefällig, wohlwollend* ~ ; wenn man die Sache aus der Nähe betrachtet, erscheint sie doch etwas anders; etwas mit Muße, mit Wohlgefallen ~ 2 **jmdn. od. etwas als etwas** ~ *als etwas ansehen, für etwas halten* [なにかをなにかだと見なす, なにかだと考える]; eine Angelegenheit *als erledigt* ~ ; ich betrachte ihn als den größten Dichter unserer Zeit; er betrachtet ihn als seinen Freund, Feind; er betrachtet sie als sein Dienstmädchen 3 **etwas** in bestimmter Weise ~ *beleuchten, bedenken, beurteilen* [なにかをある仕方では解明する, よく考えてみる, 評価(判定, 判断)する]; die Sache läßt sich auch von einem anderen Standpunkt aus ~ [zu *trachten*]“

- (2) *Duden, Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in acht Bänden*, 2., völlig neu bearbeitete stark erweiterte Auflage, Band 1, A-Bim, 1993 Mannheim; Leipzig; Wien; Zürich, S.509-510.

„betrachten [mhd. *betrahten*, ahd. *bitrahtōn* = *bedenken, erwägen; streben, zu trachten*] : 1. [*längere Zeit*] *prüfend ansehen*

---

3) ただ、筆者が意識的に *Grimm* を取り上げなかったと思われることを避けるために、本稿の末尾に【付】として掲げておくので、関心のある方はご覧いただきたい。

[[かなりの時間をかけて] 吟味するように凝視する]: jmdn., etw. neugierig, ungeniert, aus nächster Nähe, von oben bis unten, mit Aufmerksamkeit b.; Wieder betrachtete er wohlgefällig das hübsche Mädchen in seinem schwarzen Kleid (Kronauer, Bogenschütze 119) ; ein Bild, ein Bauwerk eingehend b.; seinen Bauch, sich im Spiegel b.; ich habe mir die Gegend betrachtet; bei Licht betrachtet (*bei genauem Hinschauen*) ist die Sache etwas anders; Ü Moskau betrachtet voller Spannung ... die neuen Männer in Washington (Dönhoff, Ära 73). 2. für etw. halten [なにかをなにかだと見なす, なにかだと考える]: er betrachtet sich als mein/(auch:) meinen Freund; Ich betrachte mich als ein preußischer Hanseat (Spiegel 37, 1982, 32) ; Er betrachtet sich als den Hausherrn (Spiegel 35, 1987, 96) ; jmdn. als Verbündeten, als enterbt b. 3. a) *in einer bestimmten Weise [zu] beurteilen [suchen]* [なにかある仕方 with 評価 (判定, 判断) する [そうすることに努める]]: etw. einseitig, objektiv, von zwei Seiten, unter einem anderen Aspekt b.; er hatte es nicht gern, wenn man seine Bücher kritisch betrachtete (Reich-Ranicki, Th. Mann 28) ; so betrachtet, ist die Angelegenheit anders zu beurteilen; b) *zum Gegenstand einer genauen Untersuchung, Beurteilung machen* [厳密な研究, 評価 (判定, 判断) の対象にする]: wir betrachten die Entwicklung von der Romanik zur Gotik.“

(3) Deutsche Akademie der Wissenschaften zu Berlin, Institut für deutsche Sprache und Literatur: *Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache*, Dritte, durchgesehene Auflage, 8. und 9. Lieferung, Berlin 1967, S.571.

„**betrachten** 1. jmdn., etw. eingehend, prüfend ansehen [誰かを, なにかを, 詳細に吟味するように凝視する]: jmdn. von oben bis unten, lange, unverwandt, unablässig, kühl, mißtrauisch, nachdenk-

lich, stumm, schweigend, mitleidig, zärtlich, neugierig, ungeniert, verwundert, staunend, aus der Nähe, mit Kennermiene b.; seinen Nachbarn, sein gegenüber, den Gast aufmerksam b.; e. Gemälde, Fotografie, Denkmal, Gebäude andächtig, gedankenvoll b.; sich b.: sich im Spiegel b.; /*bildl.*/ die Welt durch eine rosarote Brille b. (*alles zu günstig beurteilen*) 2. /*übertr.*/ *seine Gedanken, Überlegungen auf einen Gegenstand in besonderer Weise richten* [並々ならぬ仕方での自分の思考, 熟慮をある対象に向ける]: etw. wissenschaftlich b.; einen Vorgang gesondert, isoliert b.; die Entwicklung dialektisch, objektiv, von allen Seiten, im Zusammenhang b.; die politische Lage b.; wenn man die Angelegenheit näher, genauer, bei Licht betrachtet, ergibt sich folgendes ... 3. *jmdn.*, etw. als *jmdn.*, etw. b. *jmdn.*, *etw. als jmdn.*, *etw. ansehen, einschätzen* [誰か, なにかを, 誰か, なにかだと見なす, 思う]: *jmdn.* als seinen Freund, Feind b.; *jmdn.* als einen Gauner, Schwindler, Scharlatan b.; sie betrachteten ihn als einen der Ihren; du kannst dich als enterbt b.; Ich darf Sie also als engagiert betrachten? BÖLL *Billard* 19 ; etw. als seine Pflicht, sein Eigentum b.; ich betrachte Ihre Worte als Beleidigung!; sie b. den Besuch als willkommenen Abwechslung“

以上の語義とそこへの例文をと見られれば分かるように, 基本的に, 三つの語義が挙げられている。

第1に, 誰かを, なにかを, かなりの時間をかけて, 熟慮するように, または十分に味わうように, じっくりとあるいは詳細に吟味するように, 見つめる, 凝視する, 眺める, 観察する, という語義である。この語義が, 「考慮する」とか「十分に念頭に置く」という意味と異なっていることは明らかである。

第2に, 誰か, なにかを, 誰か, なにかだと見なす, だと考える, だと思ふ, という語義である。この場合には必ず ~ als ~ betrachten とな

る。これも、「考慮する」とか「十分に念頭に置く」という意味でないことは明らかである。

第3に、なにかを、よく考えてみる、なんらかの仕方で解明する、自分の思考、熟慮を意識的にある対象に向ける、なにかを、厳密な研究、評価(判定, 判断)の対象にする、なんらかの仕方で評価(判定, 判断)する、これらのことをしようと努める、といった語義である。『資本論』などマルクスの著作にある *betrachten* で、圧倒的に「考察する」と訳されるのは、この第3のケースである。この第3の場合には、「考慮する」という語を使うこともできなくはないが、それは、日本語で「考慮に入れる」、「考慮に入れておく」という場合の「考慮」ではなく、したがってまた、富塚氏の言われる「十分に念頭に置く」という意味での「考慮する」ではなくて、じっくり考える、という意味の「考慮」あるいは「熟慮」である。

以上の語義の整理が恣意的なものでないことを見るために、以下さらに、三つの大きな独和辞典での語義を掲げておこう。

(1) 『独和大辞典』, 第2版, 小学館, 1998年, 360ページ。

「**betrachten** 1 観察する；考察〈考究〉する：ein Bild ~ 絵を鑑賞する | *et. objektiv <wissenschaftlich>* ~ …を客観的〈科学的に〉に見る | *et. durch eine gefärbte Brille ~* | *eine Frage von allen Seiten <einer andren Seite>* ~ 問題をあらゆる角度から〈別の見方で〉検討する || *genau betrachtet* 詳しく見れば〈考えると〉. 2 みなす：jn. als seinen Freund ~ …を友人と思う | *et. als seine Pflicht* ~ …を自分の義務と心得る.]

(2) 『独和広辞典』, 三修社, 1986年, 213ページ。

「**betrachten** ① *t* ① [つくづく・じっくり] 見る, 熟視する, 眺める, 鑑賞〈観覧〉する. ②考察する；(見て) 吟味する. ③((書)) 見[てい]る, みなす (*etw <jn> als…ある物<人>を…と*). ◆jn von oben bis unten ~ある人を頭のとっぺんから爪先までつくづくと見

る/genau betrachtet よくよく見れば、よく考えれば、② r (sich)  
①自分の姿を（映して）見る。②自認する（als……であることを）。

◆ sich im Spiegel～自分を鏡に映して見る .」

(3) 『相良大独和辞典』, 博友社, 1958年, 218ページ。

「**betrachten** ① (に) 目を向ける, 熟視する, 観察する; 仔細に吟味する; ein Bild ~, 絵にながめ入る; genau (od. bei Licht) betrachtet, 詳しく観察すると. ② (に) 心を向ける, 沈思する, 熟慮する. ③ et. (A) als et. (B) ~, 或物 (A) を或物 (B) と思う, みなす; ich betrachte mich als Schuldigen, 私は罪を自認する .」

このほかにも, 類語辞典 (とくに „Johann August Eberhards synonymisches Handwörterbuch der deutschen Sprache“, Siebzehnte Auflage, Leipzig 1910) での記述や独英辞典などでの語釈にも参考になるものがあるが, ここではもう省くことにしよう。要するに, betrachten の語義を大きく言えば, ①じっくりと観察, 吟味する, ②考察する, 熟慮する, ③みなす, という三つだと言することができる。

これだけ見てきても, 富塚氏が「十分に念頭に置くという意味合いで用いた」と言われる「考慮する」という日本語と, betrachten というドイツ語とのあいだには, かなりの懸隔があることが明らかである。„Zu betrachten ch.VII. Buch III.“ での betrachten の場合には, 「みなす」という意味がないことは明らかだから, それ以外の語義をここに入れてみられれば事柄ははっきりするであろう。「第3部第7章をじっくりと観察, 吟味すべきである」というのも, 「第3部第7章を考察する, 熟慮すべきである」というのも, どちらも異様であることに変わりはない。要するに, 富塚氏は betrachten とは異なる「意味合い」の「考慮する」という語を使うことで, 自分だけに通用するつじつま合わせをやらされただけだったのである。



## 7. マルクスの使用例

そこでさらに一步を進めて、マルクスが *betrachten* という語をどのように使っていたか、ということ調べてみることにしよう。

彼の著作物で使われている *betrachten* という語の数は相当なもので、全部を挙げることはとうていできるものではないが、それでも、なるべく恣意的でなく、なるべく網羅的に彼の用語法を確認するために、ドイツで作成された *Digitale Bibliothek, Bd.11, Marx-Engels Ausgewählte Werke, Berlin 1998* を利用しよう。しかしこれは、その編者が MEW のなかから主要著作として選んだものの CD 判であって、草稿類はもちろん収録されていない。そこでこれに、筆者の手もとにある第 2 部第 1 稿から第 8 稿までのすべての第 2 部草稿に見られる用例をつけ加えることにしよう。といっても、*betrachten* の変化形 (*betrachtet* usw.) をも含めて検索をすると結果は膨大な数にのぼるし、*betrachten* という不定形だけで検索しても相当な数になるので、それらを全部挙げる必要もないであろう。ここでは、不定形 *betrachten* が使われている箇所から、「のちに～のところを考察しよう」という言い方、ないしそれにごく近い表現となっているものだけを網羅的に挙げよう。*betrachten* にかかわる部分には下線をつけ、関係する部分に簡単な邦訳をつけておこう。

- (1) Wie er sie reflektiert, betrachten wir im folgenden Abschnitt.  
 (『経済学批判』 MEW, Bd.13, S.75.) 「流通過程がこの運動をどのようにに反映するかは、次の Abschnitt で考察する。」
- (2) Die Verwandlung des Gelds in Kapital werden wir betrachten im 3. Kapitel, das vom Kapital handelt und den Schluß dieses ersten Abschnitts bildet. (ebenda, S.160.) 「貨幣の資本への転化は第 3 章で考察するであろう。……」
- (3) Die Verwandlung des Produktionsweise selbst durch die Unterord-

nung der Arbeit unter das Kapital kann sich erst später ereignen und ist daher erst später zu betrachten. (『資本論』第1巻) MEW, Bd.23, S.199.) 「資本のもとへの労働の従属による生産様式そのものの転化はのちになって生じうることであり、だからまたのちになってはじめて考察されるべきである。」

- (4) Die Art und Weise, wie die immanenten Gesetze der kapitalistischen Produktion in der äußern Bewegung der Kapitale erscheinen, sich als Zwangsgesetze der Konkurrenz geltend machen und daher als treibende Motive dem individuellen Kapitalisten zum Bewußtsein kommen, ist jetzt nicht zu betrachten, aber soviel erhellt von vornherein: ... (ebenda, S.335.) 「資本主義的生産の内在的諸法則が諸資本の外的運動のうちに現われ、競争の強制法則として実現され、したがって推進的な動機として個別資本家の意識にのぼる、その仕方様式は、いまは考察することができないが、……。」
- (5) Den Umstand, daß der Zins auf den average Profit zu beziehen, werden wir gleich näher betrachten. (『資本論』第3巻) MEW, Bd.25, S.372. [ここでは、MEGA, II/2, S.433による。] 「利子は平均利潤に関連させるべきだという事情は、すぐにもっと詳しく考察するであろう。」
- (6) Wir betrachten in den folgenden Kapiteln den Kredit mit Bezug auf das zinstragende Kapital als solches, sowohl seinen Effekt auf dieses, wie die Form, die er hierbei annimmt; ... (ebenda, S.457.) 「以下の諸章では、信用を利子生み資本そのものとの関連のなかで考察する。すなわち信用が利子生み資本に及ぼす影響をもそのさい信用がとる形態をも考察する。」〔これは、MEGA, II/2, S.505でのマルクスの次の文章をエンゲルスが書き換えたものであるが、エンゲルスがマルクスとまったく同じ用法を使っていることを見ることができる。Wir gehen jetzt über auf Betrachtung des zinstragenden Capitals als

solchen [des Effects auf es durch das Creditwesen, wie die Form, die es annimmt.], ...)

- (7) Es ist dieß das quid pro quo, das wir im folgenden § betrachten und das nothwendig zusammenhängt mit dem Schein, als ob... (ebenda, S.854. [ここでは, MEGA, II/2, S.866による。]) 「これは, われわれが次節で考察する取り違えであって, ……」」

Dieß ist die Form, die wir zunächst zu betrachten haben. ((第2部第1稿) S.4; MEGA, II/4.1, S.144.) 「これがまずもって考察すべき形態である。」

- (8) Wir wollen beide, mit Bezug auf die Form der Geldcirculation, worin sich diese Verwandlung darstellt, besonders betrachten... ((同前) S.10; ebenda, S.153.) 「[この] 二つ [の部分] を, こうした転化を表わす貨幣流通の形態に関連させて, 別々に考察しよう。」

- (9) Es wird später noch nach anderer Seite die „anticipirte Geldform künftiger Arbeit“ zu betrachten sein. ((同前) S.16; ebenda, S.161.) 「将来の労働の先取りされた貨幣形態」は, のちにさらに別の側面から考察されなければならないであろう。」

- (10) Indeß nehmen wir zur Vereinfachung an, daß mit demselben W wieder begonnen wird, da der Accumulationsproceß nichts an der Form ändert, und die realen Umstände, unter denen sich die Accumulation in dem Circulationsproceß darstellt, erst in ch.III dieses Buchs betrachtet werden können. ((同前) S.19; ebenda, S.166.) 「……蓄積が流過程で現われるときの実体的な諸事情はこの部の第3章ではじめて考察されうることなので……」

- (11) Was wir hier zu betrachten haben, ist zunächst nur das aus der Metamorphose der Waare nothwendig hervorgehende begriffliche Moment ... ((同前) S.41; ebenda, 202.) 「ここでわれわれが考察しなければならないのは, さしあたりは, 商品の変態から必然的に生じ

てくる概念的な契機だけである。……」

- (12) Die Punkte sind zu betrachten nach der Reihenfolge der römischen Ziffern. ((同前) S.79 ; ebenda, S.267.) [これらの論点はローマ数字で示された順に従って考察されるべきである。]
- (13) So weit man unter Accumulation von Geldcapital versteht, daß ein Theil der Revenue, der in Capital zurückverwandelt werden soll, zunächst als Schatz brachliegt etc, ist diese Sache näher im Capitel IV zu betrachten, ditto über das zinstragende Capital. ((同前) S.141 ; ebenda, S.360.) [このことも、同じく利子生み資本についての第4章で詳しく考察すべきである。]
- (14) Diese Ideenwirre wird durch verschiedene Cirkulationsphänomene noch befestigt, die wir erst später betrachten können. ((第2部第4稿) S.1.) [この錯乱は、のちにはじめて考察することができるさまざまな流通現象によってさらに打ち固められる。]
- (15) Wir wollen, um die Sache zu vereinfachen {da wir erst später den Kaufmann als Kapitalisten od. das Kaufmannskapital betrachten} annehmen dieser Agent zum Kaufen u. Verkaufen sei ein Mann, der seine Arbeit verkauft. ((同前) S.36.) [……資本家としての商人または商人資本はのちにはじめて考察するのだから……。]
- (16) Diese Figur u. die später sub III) zu betrachtende bilden die Grundlage seines Tableau Économique, welches Mirabeau père den 7 überlieferten Weltwundern als 8.tes zurechnet. ((第2部第2稿) S.12.) [この図式と、のちにIIIのもとで考察すべき図式とは……。]
- (17) Aber der Aberglaube der Pol. Oekonomie an die Werthbildende Kraft der Umlaufszeit wird befestigt durch mannigfache, erst später zu betrachtende Phänomene, z.B. Erhöhung der Waarenpreise oder des Profits in Folge verlängerter Umlaufszeit. ((同前) S.19.) [……のちに考察すべきさまざまな現象、たとえば流通時間が

長くなったために生じる物価や利潤の上昇は、……」

- (18) Dieß ist grade, was wir in diesem Abschnitt zu betrachten hatten.  
 ((同前) S.104.) 「このことが、この Abschnitt で考察しなければならなかった当のものである。」
- (19) Wir werden später im 3. Buch die Analyse des Waarenpreises durch Smith in der Form betrachten, worin er sie giebt, nämlich ihre Analyse in die 3 Bestandtheile von Arbeitslohn, Profit und Grundrente. ((同前) S.134.) 「のちに第3部で、スミスが……という形態で行なっている商品価格の分析を考察するであろう。」
- (20) Es ist das constante Kapital der Abtheilung A) die wir später betrachten werden. ((同前) S.138.) 「それは部門Aの不変資本であつて、この部門はのちに考察するであろう。」
- (21) ...[[abgesehn von dem später zu betrachtenden CI]]...((第2部第8稿) S.25.) 「のちに考察されるべき CI は別として」
- (22) es sei dieser Werth zerfällbar in  $20c + 5v + 5m$ ;  $20c$  ist auszutauschen gegen andre Elemente von CI, und dies ist später zu betrachten, aber  $5v + 5m$  (I) sind umzusetzen gegen Elemente von  $(v + m)$  II. ((同前) S.38.) 「……このことはのちに考察されるべきである……」
- (23) Es zeigt sich - auch abgesehn von dem später zu betrachtendem C (g) I, wie selbst bei einfacher Reproduction, wenn hier auch Accumulation im wahren Sinn des Worts - i.e. Reproduction auf erweiterter Stufenleiter - ausgeschlossen, dagegen Geldaufspeicherung oder Schatzbildung nothwendig eingeschlossen ist. ((同前) S.39.) 「……のちに考察されるべき C (g) I は別としても……」
- (24) ...[[höchstens mit geringen Abzug für das Dechet (was erst sub IC zu betrachten und für eigne Schatzbildung)]]...((同前) S.40.) 「……このことは、ICのところではじめて考察されるべきであり、

……]

(25) Dies zu betrachten sub I bei der einfachen Reproduction. (〔同前〕

S.53.)〔これは、単純再生産のところでIのもとで考察されるべきである。〕

以上の25箇所は、上記文献のなかで、マルクスがbetrachtenという語を使って、後続するどこかを指示した箇所あるいはそれに類する箇所の——筆者の拾うことができた——すべてである。

見られるように、ここには、なにかを「考慮すべきである」とかなにかを「十分に念頭に置くべきである」と言っているような箇所、あるいはbetrachtenにそのような訳語を当てることができるような箇所は一つもない。しかも、ここでbetrachtenすることの対象とされているのは、一つの例外もなく、後続する特定の部分ではなく、なんらかの客観的な事象である。そうしたなんらかの事象を後続する特定の部分でbetrachtenする、と言っているのである。このbetrachtenは、まさに「考察する」と訳されるに相応しいものである。

なお、小生は上記の文献のなかでbetrachtenという語が使われているすべての箇所——その変化形をも含めて——での用例を調べてみた結果、これらの文献にかんするかぎり、マルクスのbetrachtenは、例外なく、①じっくりと観察、吟味する、②考察する、③みなす、の三つのうちのどれかにはいる用法であることを確信した。異論があるなら反証を挙げていただきたい。それに役立つかもしれないヒントをさしあげておこう。上記の文献のなかには「経済学批判要綱」、『1861-1863年草稿』、および「第6章 直接的生産過程の諸結果」がはいっていないから、これらのものを博搜的に調べられたなら、そのような反証に出くわすという仕合わせに巡り会われるかもしれない。

## 8. betrachten の対象はなにか？

以上、まず betrachten という語の語義を調べて、それには「十分に念頭に置くという意味合い」での「考慮する」という意味はないことを確認し、さらにマルクスがこの語をそのような意味で使っている箇所もないこと、さらに——上記文献の範囲内では——マルクスが betrachten という語を使って後続箇所を指示するときには、例外なく、〈どこそこをなにを考察する〉という言い方であって、〈どこそこを考慮する〉とか〈どこそこを十分に念頭に置く〉とかいう表現は一つもないことを見てきた。

富塚氏が、それでもなお、マルクスはここで、「第3部第7章を考慮すべきである」とか「第3部第7章を十分に念頭に置くべきである」と言っていると主張し続けようとするのであれば、氏は、膨大な数の betrachten という語のマルクスの用語例から、マルクス自身が同じ意味で使っている例を、たった一つでいいから挙げてみられるべきである。

たしかに、betrachten は他動詞だから、„Zu betrachten ch. VII. Buch III.“ という文章をこのまま、だれが書いたどんな文献のどこから取ったどんな文章であるか、ということから切り離して、ネイティブを含むドイツ語学者に見せれば、だれもが「第3部第7章を betrachten すべきである」と読むであろう。その場合、betrachten という語がどのような意味をもちうるかについては、おそらく各人各様の解釈をしてみせるか、あるいは解釈不能と申明するかであろう。

しかし、これがマルクスの草稿のなかにある一文であることを知って読む MEGA 編集者であれば、単純にそのような読み方で済ませることはしないであろう。これがどこに置かれているか、その前後がどうなっているか、などのことも考慮に入れながら、文意をできるかぎり正しく読み取ろうとするであろう。

この一文は、タイトル「9 再生産過程の攪乱」の直後に書かれているも

のである。そこからはまず、„Zu betrachten“の目的語つまり対象は、まさにこのタイトルにある「再生産過程の攪乱」であり、したがって、この文は、„Zu betrachten ch. VII. Buch III. [: Störungen im Reproductionsproceß]“という意味をもつ文であろうと推測できる（言うまでもなく、筆者の訳文、「これは、第3部第7章で考察すべきである」のうちの「これは」は、この対象を明示したものであった）。そこでまた、ここでの„ch. VII. Buch III.“というのは、その対象を betrachten すべき後続箇所を指す部分であることが推測される。したがってこの文は、マルクスによって、„Zu betrachten [in] ch. VII. Buch III. [: Störungen im Reproductionsproceß]“という意味をもつものとして書かれたのだ、という推測を行なうであろう。これが当然の読み方なのである。

繰り返して言うが、草稿でのマルクスの文章は、つねに完全であるわけでないどころか、文法的に誤っている文もあれば、前置詞や否定詞が落ちていたり、格が誤っていたり、単数と複数が照応していなかったり、文法的に破格だというよりも単純に誤っているというようなケースはあちこちにある。マルクスの言わんとするところは明白に読みとれるけれども、文法に固執して読もうとすればドイツ語として読みようのないような文章さえもある。„Zu betrachten [in] ch. VII. Buch III.“のように、あるべき in がいないというようなケースも希有ではないのである。なぜ欠けたのかということについては、推定できる場合もあれば、推定の手がかりがない場合もあるが、いまの場合について言えば、なんの手がかりもないと言わべきであろう。マルクスは、ここに入れるべき in とか sub という語を単純に書き落としたのかもしれないし、「月報」で引用したフォルグラーフの言うように、コロンを置くような気持で書いたとみることもできるかもしれない。マルクスの草稿での文章がどのようなものであるのか、そこにはどんな文章上の圧縮した表現や省略や誤記があるか、ということを知らない人であれば、ドイツ人でさえも、マルクスの草稿のなかの文章を正しく理解できないことが十分にありうるのである。草稿をよく知っているド



イッ人であるフォルグラーフや、またロシア語訳を作成したチェプーレンコの方が、マルクスの草稿を知らないドイツ語学者よりも、この箇所を正確に読むことができる可能性が充分にあるのである。

## むすび

富塚氏が „Zu betrachten ch. VII. Buch III.“ という文について、「これは、第3部第7章で考察すべきである」という拙訳およびロシア語訳は誤訳であって、「第3部第7章を考慮すべきである」と訳さなければならないのだ、と主張されることになった原因は、以上のところからほぼ明らかになったであろう。

氏は、いくつかの思い込みにがんじがらめに縛られているのである。

第1に氏は、「9)再生産過程の攪乱」というタイトルの直後に「これは、第3部第7章で考察すべきである」と書いてあれば、マルクスが「再生産過程の攪乱」を第2部第3章ではなくて第3部第7章で考察する、と言っていることになるのだ、と思い込まれている。

この思い込みから、氏は第2に、筆者が「これは、第3部第7章で考察すべきである」と訳したのは、読者に、あたかもマルクスが「再生産過程の攪乱」を第2部第3章ではなくて第3部第7章で考察すると言っているかのように読ませるための意図的な改変にちがいない、と思い込まれたようである。

この思いこみは、ドイツ語の文法的規則に厳密に従わなくてはならないという信条によるものではないかと思われる第3の思い込みと結びついている。すなわち氏は、他動詞のあとにある名詞はその他動詞の目的語であるほかはないのだ、と一途に思い込まれていて、„Zu betrachten ch. VII. Buch III.“ という文は「第3部第7章を betrachten すべきだ」としか読めないのだ、読んではならないのだ、と思い込まれているのである。

しかし、氏にとって不幸だったのは、第1に、betrachten という語を

ごく普通に使われる訳語の「考察する」という日本語に置き換えると、「第3部第7章を betrachten すべきだ」という文は「第3部第7章を考察すべきだ」という奇態なものになってしまう困難であった。そこで氏は、betrachten という語の訳語として、「十分に念頭に置くという意味合い」で「考慮する」という言葉を用いることによってこの困難をすり抜けるという迷案を思いつかれたのであった。

ところが、氏にとって不幸だったのは、第2に、この箇所以外のどこでも、betrachten という語をマルクスが、「十分に念頭に置く」ないし「考慮する」という「意味合い」で使っていなかったことである。マルクスは betrachten という語を、「じっくりと観察、吟味する」か、「考察する」か、そうでなければ「～を～だと考える」か、このうちのどれかの意味で使っているのであって、「考慮する」という訳語がぴったりと収まるような用例を見いだすことはできない。

さらに第3に、氏にとって不幸だったのは、マルクスが betrachten という語を使って後続のどこかを指示するとき、そのどこかを betrachten すべきだ、などとはけっして言わず、必ず、なにかの事柄をどこかで betrachten する、と表現していたことである。

最後に、氏にとって最も不幸であったのは、草稿中のマルクスの文章には明らかな文法的誤りを含む文が希有ではないという事実を軽く見られたか、このことをよく理解しておられなかったことである。氏には、そのような誤りを訂正したうえでマルクスの文意を正確に読み取ることは避けられないばかりか、むしろ必要な手続きであることはまったく予想外のことだったようである。

以上で、富塚氏の「第3部第7章を考慮すべきである」という訳文の方こそ原文の意味を完全にすり違えているということが明らかとなったが、すでに見たように、氏はこの迷訳をもって、マルクスのこの一文を、氏の主張の一つの重要な論拠にしたあげている。このようなマルクスの読み方を筆者は、我が田に水を引くような引用、すなわち「我田引用」と呼ぶ

のである。

本稿で論じようとしたことは以上で終わるが、残されている課題について一言しておこう。

問題の、「これは、第3部第7章で考察すべきである」という文でマルクスが考えていたと思われることについては、すでに述べた。要するに、第2部第3章で「再生産過程の攪乱」を考察するのだが、この問題はここだけで終わるのではなく、さらに第3部第7章でもこの問題を考察しなければならない、という覚え書きだったのだと考えられる。

しかし、そのように考えられるとしても、この覚え書きそのものからは、第2部第3章で論じられるべき「再生産過程の攪乱」とはどのようなものだったのか、ということについても、また、第3部第7章で「再生産過程の攪乱」についてどのようなことを「考察」すべきだと考えられたのか、ということについても、なにひとつ分かるわけではない。

しかも、第1稿の末尾にこの項目が記されたのち、第2稿から第8稿にいたる第2部の諸草稿のなかで第3章（のちの第3篇）のために書かれた、第2稿および第8稿には、「再生産過程の攪乱」にあたる考えられる部分は含まれておらず、また、「資本主義的生産の総過程における貨幣の還流運動」を指すものと考えられる「第3部第7章」は、第2部第1稿の擱筆後ほどなくして、第3部執筆中にプランから消え失せ、書き終えられた第3部第1稿にはこの章はなかった<sup>4)</sup>。

---

4) ただしこのことは、第1に、マルクスが第2部第3篇のなかで「再生産過程の攪乱」を論じないことにしたことを必ずしも意味しない。というのは、第8稿までで第2部第3篇の執筆が完全に完了したのだと確言できるわけではなく、マルクスが第8稿以後にもさらに「再生産過程の攪乱」を含む残りの部分を執筆しようとしていた可能性を排除できないからである。第2に、マルクスが、「資本主義的生産の総過程における貨幣の還流運動」という独立の章を置くことをやめたことは確実であるが、しかし、第3部の末尾近くで「再生産過程の攪乱」を「考察」することそれ自体をやめたことを必ずしも意味しない。というのは、「第3部第7章で考察すべき」だと考えられていた「再生産過程の攪乱」についての叙述が、「第7章 諸収入とそれらの諸源泉」のなかに、とくにその「2」（エンゲルス版の「生産過程の分析のために」）のなかに含められなかった、あるいは含められる予定がなかったと断定できるわけではないからである。

したがって、第2部第1稿を執筆した時期に、マルクスが第2部第3章のなかの「再生産過程の攪乱」という項目でどのようなことを論じようとしていたのか、またさらに、「資本主義的生産の総過程における貨幣の還流運動」を主題とするはずであった第3部第7章のなかで「再生産過程の攪乱」についてどのようなことを論じようとしていたのか、ということは、残された第2部第1稿以降の第2部諸草稿と、第2部第1稿とほとんど同時に書かれた第3部第1稿とから推測することができるだけである。

本稿ではこの問題に立ち入ることはしないが、これについての筆者の考えていることをごく一般的、抽象的に言えば、社会的総資本の再生産と流通の分析で明らかにされる再生産の諸条件が同時に恐慌の諸条件であり、社会的再生産の実体的諸条件の分析が同時に恐慌の発展した可能性の解明であって、ここで恐慌の抽象的形態が内容諸規定を受け取るのだ、ということ想起するならば、第2部第3章で「再生産過程の攪乱」が論じられること自体にはなんの不思議もないし、第2部第3章での社会的再生産の実体的諸条件の分析を基礎とし、そのうえで社会的総再生産過程における貨幣運動を総括的に考察するという構想のもとに予定されていた第3部第7章で、貨幣運動を前提して一度「再生産過程の攪乱」が取り上げられる予定だったこともそれなりに納得のいくところである。しかし、この構想は実現されなかった。だからむしろ、なぜ、一部はとりやめられ、一部は実現されないままに終わったのか、ということ、第3部および第2部の諸草稿に見られるマルクスの研究の過程に即して明らかにする課題が残されているわけである。

#### 【付言】

富塚氏は、論稿「再生産論の課題」で『資本論体系』『月報』での拙稿を批判されるさいに、「月報」での拙稿には存在しない文章を「引用」されたうえで、それにたいして非難を加えられている（氏の論稿54ページ下から7-3行、55ページ上から7-9行）。氏はさらに、この拙稿には存在しないフォルグラーフ

の発言内容なるものを、拙稿に書かれているかのように挙げられて、それに批判を加えられている（氏の論稿61ページ下から8-2行）。

こういうでたらめなことをされた理由を、氏自身が、氏の論稿の最後に加えられた「あとがき」なるものなかで次のように明かされている。

「本稿は、『資本論体系』第1巻……の「月報」に寄せられた大谷氏の異色の論稿「メガの編集者は禁欲を要求される……」への対応として書かれた「トランプ遊びにもルールはある、その切り札は私の持ち分」と題する小論——それは、学術誌などに近年よく見られる、批判とreplyを同時掲載する手法によって、同「月報」に載せる予定であった——を、拡充して成ったものである。その後、大谷氏の論稿にも編集部からの註文により細部になにほどの改変が加えられたかもしれないが、議論の本筋には全く変更はないようであるし、また、本誌記念号の制約もあるので、このまま発表することにする。」（「再生産論の課題」, 71ページ。）

これは、氏が、拙稿のゲラが責了となる以前に筆者の原稿ないし初校ゲラを入手され、この原稿ないし初校ゲラにたいしてすぐに反論を書かれ、しかもそれを、拙稿が掲載される「月報」の同じ号に掲載しようと目論まれたことを氏自身が告白している文章である。

氏はこの『体系』の「編集代表」の一人であるから、その権限において、氏が編集を担当したわけでもない第1巻に添付される「月報」の原稿ないしゲラを入手されたとしても、もちろん、そのこと自体を非難することはできない。また、そのような権限を行使して目を通した筆者の原稿に激昂し、これにたいする反論を「学術誌などに近年よく見られる、批判とreplyを同時掲載する手法によって、同「月報」に載せる」べく画策されることも、またそのことを「予定」してそこに書くべきことを構想されるのも、富塚氏個人の完全な自由である。

しかし、残念ながら、ことは氏の思惑どおりには運ばなかった。『資本論体系』第4巻の本文および「月報」で筆者の訳文が批判されたので、次に発行される巻の「月報」にそれにたいする反論を書かせるように筆者が要求したのに

たいして、すでに述べたように、同巻の「編集者」、次回配本予定の第5巻の「編集者」、ないし、『体系』の「編集代表」がそれを拒否したこと——この拒否がどの段階でどのように協議されたうえで決定されたのかも、あるいはおおよそ協議されたのかかどうかということ自体も、またこの拒否に富塚氏がどのように関与されていたかも、筆者は知るよしもないのであるが——を考えれば、正常な感覚の持ち主であれば、拙稿にたいする富塚氏の反論を「学術誌などに近年よく見られる、批判とreplyを同時掲載する手法によって、同「月報」に載せる」ことも、また、その次に発行される巻（つまり最後の第10巻）に載せることも、著しく平衡を欠くものであることは明らかであって、筆者は、そのようにことが運ばなかったのは、富塚氏を除く『体系』の関係者の良識ないしバランス感覚を示すものであったと考えている。

いずれにしても、こうして氏の論稿は、拙稿が載った『体系』第4巻の「月報」にも最終配本となった第10巻の「月報」にも載らないことになった。

そこで富塚氏は、「学術誌などに近年よく見られる、批判とreplyを同時掲載する手法によって、同「月報」に載せる予定であった」原稿に手を加えて、中央大学の『商学論纂』に「再生産論の課題」なる論稿を書かれたのであった。氏のこの勤勉さは大いに称揚されてしかるべきことではあろう。

しかしながら、いかに『商学論纂』誌の「記念号の発刊期日の制約」なるものがあつたとしても、すでに学部を離れておられる名誉教授の富塚氏が、「大谷氏の論稿にも編集部からの註文により細部になにほどかの改変が加えられたかもしれないが、議論の本筋には全く変更はないようである」といった自分勝手な判断にもとづいて、まだ活字になっていない筆者の原稿にたいする批判を公表される、というのは筆者の理解を絶することである。

筆者は校正のさいに、推敲のために拙稿のあちこちに手を入れた。富塚氏は、あたかもそれが「編集部からの註文」によるものであるかのように書かれているが、そのように書かれる以上、氏はそうであったと考える論拠をもっていたはずである。氏には、そのような論拠を示して、筆者が「編集部からの註文」によって原稿に手を入れたことを論証する義務がある。氏はこの拙稿にた

いしてなにかを書かないではいられないであろうから、筆者はあらかじめ、そのさいにこのことを明確に論証することを求めておこう。

それはさておき、筆者が拙稿に手を入れたために、活字になった「月報」での拙稿は筆者の原稿とはあちこちで異なっている。それぞれの箇所での変更の意図はさまざまであるが、いずれにしても、筆者の公表したものは最終的に活字になったものである。

富塚氏は、筆者が公表していない原稿段階での書き物を、筆者の了解なしに公開し、批判されたのである。しかも氏は、「その後、大谷氏の論稿にも編集部からの註文により細部になにほどかの改変が加えられたかもしれないが」と書かれることによって、氏が、筆者の原稿と最終的に活字になったものが同じものでないことを予想されておられたか、あるいはすでに知っておられたことを明かされている。

富塚氏が、一般に、だれかある筆者の了解なしに、その筆者が公表していない書き物を取り上げてそれにたいする批判を公表したとしても、それにはなんの問題もない、などと考えておられるとはとうてい思えないから、氏は、第1に、「細部になにほどかの改変が加えられたかもしれない」程度の「改変」だから問題ないと考えられたか、あるいは第2に、相手が大谷であるから問題ないと考えられたか、どちらかなのであろう。

そうだとすれば富塚氏は、「細部になにほどかの改変が加えられたかもしれないが、議論の本筋には全く変更はないようである」と判断された根拠をはっきりと示すか、あるいはそうでなければ、相手が大谷であれば大谷の了解なしに大谷が公表していない大谷の書き物を引用してそれにたいする批判を公表することにはなんの問題もない、と考えられた理由を説明されるべきである。

以上ここで述べてきたことは、拙稿の本論に組み込むにはあまりにも愚劣なばばかしいエピソードでしかないので、「付言」としておく次第である。

【付】 *Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm*,  
Erster Band, A - Biermolke, Leipzig 1854, S.1706 から。

**BETRACHTEN**, *considerare, contemplari, intueri, ahd. pitrahtôn* (GRAFF 5, 515, 516), *mhd. betrahten, nnl. betrachten, schw. betrakta, dän. betragte*.

1) *beschauen ist inniger als besehen, und betrachten nachdenklicher als beschauen, vgl. oben sp. 1548. der beschauende sinnt nach, der betrachtende denkt nach. man kann keine beschauungen machen, sie erfolgen von selbst, betrachtungen aber müssen gemacht werden.* KEISERSB. s. d. m. 86\* *sagt: es ist ein groszer unterscheid zwischen gedenken (meminisse), betrachten, und schauwen. iederman kan gedenken, es gat on arbeit zû und on nutz. betrachten gat mit arbeit zû und mit nutz. aber schauwen gat on arbeit zû und mit nutz. betrachten = contemplari in folgenden stellen: da ich gesichte betrachtet in der nacht, wenn der schlaf auf die leute fellet. Hiob 4, 13 ; betrachte ihn genau und prüge dir alle seine züge ein; ich betrachtete diese gegend lange und im einzelnen, um mir das andenken daran voll zu bewahren; jedes ansehen geht über in ein betrachten, jedes betrachten in ein sinnen, jedes sinnen in ein verknüpfen. GÖTHER 52, XII;*

betrachte wie in abendsonneglut

die grünumgebnen hütten schimmern. 12, 59.

2) *betrachten, erwägen, überlegen:*

ich habs in meinem herzen petracht. *fastn. sp. 451, 14;*  
ein mensch, der da geistliche ding betrachtet. KEISERSBERG s. d. m. 10\*;  
betracht, das ein solcher verklapperer ist verworfen von gott. 48\*;  
das seind sünden, die betracht und ker dich an niemanns loben und schmeichlen. 34\*;  
betracht darnach, das alle ding zergänglich seind, wider die heuwschrecken, die der wind hinweg weiet. also wenn du betrachtetest durch den tod, das dir die sonn wirt undergon und dir die augen werden brechen. *daselbst;* gedenk der vorigen zeit bis daher, und betrachte was



er gethan hat an den altern veteren. 5 *Mos.* 32, 7; und lasz das buch dises gesetzs nicht von deinem munde komen, sondern betracht es tag und nacht. *Jos.* 1, 8; ich betrachte meine wege und kere meine füsze zu deinen zeugnissen. *ps.* 119, 59; betrachte immerdar gottes gebot. *Sir.* 6, 37; und er betrachte vor bei sich selbst. 39, 11; da der ritter wider in sein herberg war kommen, betrachtet er die grosze freundlichkeit, die im widerfahren war. *buch der liebe* 36, 1; der graf hatte dieses vor betrachtet. 393, 1;

und was ich etwa schwer betracht,  
hat mir gewonheit leicht gemacht.

SCHWARZENBERG 150, 2;

dieses ist, was ich über den älteren still der ägyptischen bildhauer zu betrachten gefunden habe. WINKELMANN 3, 102; denn wenn es schon wahr ist, daz moralische handlungen, sie mögen zu noch so verschiedenen zeiten, bei noch so verschidnen völkern vorkommen, in sich betrachtet, immer die nemlichen bleiben. LESSING 10, 194;

so laszt uns jetzt mit fleisz betrachten,  
was durch die schwache kraft entspringt. SCHILLER 77\*;  
der mann vergiszt,

die goldne regel zu betrachten,

nimm diese welt, so wie sie ist. GÖKINGK. 1, 15.

*man liesz ehemals auch die praep. um folgen, wie nach schauern, sorgen und bedenken: wir wöllen und süllen betrachten umb frömde gemüs.* HAUPT 9, 371.

3) sich betrachten, *sich ansehen*: ich betrachte mich als meines versprechens entbunden: betrachtet euch hier wie zu hause; er betrachtet sich als meinen freund.

(2002年 8 月26日)

Which would Marx “betrachten”:  
“disturbances in the process of reproduction”  
or “Chap. VII of Book III”?

Teinosuke OTANI

《Abstract》

Marx wrote in the third Chapter of his first draft for Book II of “Capital” under the title of Section 9, “Disturbances in the Process of Reproduction”: “Zu betrachten ch. VII. Buch III.” In his Japanese Translation of this draft the author translated the passage: “To view [this problem] in Chap. VII of Book III.” Prof. Ryozo Tomizuka criticized this translation by claiming that the passage should be translated into: “To take into consideration Chap. VII of Book III.” This led to a controversy. In this article the author examines thoroughly arguing points in the critique by Prof. Tomizuka and discloses the many preconceived ideas that lead the opponent into the false interpretation of the passage. Besides he makes clear on the one hand that in this case the German word “betrachten” can not mean “to take into consideration”, but solely “to view” or “to examine” and on the other that Marx had never used this word in the former meaning in his writings.